

## 雪舟等楊の「団扇形倣古図」について

荏開津通彦（山口県立美術館）

このほど、雪舟による所謂「団扇形倣古図」のうちの一図で、昭和八年（一九三三）に『続双軒庵美術集成図録』に掲載されて以来所在不明となっていた「倣夏珪山水図」が、八十四年振りに発見された。「団扇形倣古図」とは、雪舟等楊（一四二〇～一五〇二?）による一連の小画面作品で、縦横約三〇糎の方形の紙の上に引かれた団扇形の枠線の内側に絵を描き、「雪舟」との署名を記すものである。各図は夏珪や牧溪といった南宋名家の画風に倣って描かれ、依拠した画家の名前が雪舟自身によって記される。狩野常信（一六三六～一七一三）の模写から、江戸時代中期までは少なくとも十二図あったことが知られるが、現存する雪舟原本はそのうち、倣夏珪三図・倣梁楷一図・倣玉潤一図・倣李唐二図の七図である。本発表では、これまでまとまった考察の対象とされることのなかったこの「団扇形倣古図」について、主題や典拠などを確認し、とくにその制作目的について検討する。

本図は現状では全て掛幅装となっているが、「倣李唐牧牛図（牧童）」（山口県立美術館蔵）を収める木箱の蓋裏に狩野常信が記した墨書には「雪舟流書十二枚」とあり、一図ずつに別れたマクリ状の形態が示唆されている。また「倣李唐牧牛図（牧童）」と「倣李唐牧牛図（渡河）」（山口県立美術館蔵）とが平成二十一年に修理された際に得られた知見として、これら二図にはほぼ同じ位置に虫損による穴があり、ある時期二図が重ねられて保存されていたことが判明する。これらのことは、本図の原状が画帖であったと考えると理解しやすい。本図のような〈倣古画図集〉は、江戸時代前期、狩野探幽（一六〇二～七四）とその周辺の画家たちによって盛んに制作された。探幽によるそうした作例のうち代表的なものが「学古帖」（個人蔵）であるが、この「学古帖」の先行形式として鬼原俊枝氏が注目したのが、永正八年（一五一一）の相阿弥による旧奥書を持つ東北大学本『君台観左右帳記』に記述される「画稿」である。「画稿」とは、名家の筆になる絵画を集めて画帖に貼り込み、金欄の表紙を施したもので、画卷や和歌集などと同様に、座敷飾りとして違棚に置かれたという。この「画稿」が唐絵の名画そのものを貼り込んでいるのに対して、雪舟の「団扇形倣古図」は倣古画（自由模写）である点が異なるのだが、唐絵の名画とその模写的な作品という関係は、実は、足利将軍家所蔵の夏珪画卷（夏珪国本）と雪舟の「山水長卷」（毛利博物館蔵）という関係に等しい。室町時代、唐絵の模写的作品は「似絵」と呼ばれ、唐絵の代替品として用いられた。「山水長卷」が、夏珪画卷の似絵として庇護者である大内政弘（一四四六～一四九五）に献上されたように、〈団扇形倣古図〉は、足利将軍家所蔵の「画稿」の似絵として、大内氏に献上することを目的に制作された可能性を指摘したい。